

『アメリカ留学体験記』

鵜浦 裕

一九九一年の夏から一年間「アメリカにおける進化論と宗教の対立」をテーマに、ハーバード大学科学史学科のポスト・ドクトラル・フェローとして研究してまいりました。八月五日、ボストンのローガン国際空港に降り立ち、翌日には向こう一年間のアパートをあっさり決め、七日にはハーバード大学科学史学科へ出向、指導教授のエバレット・メンデルソン氏や事務の方々へのご挨拶をすませるというはやわぎでした。教授、スタッフ、事務、大学院生はほとんど白人であるのにたいし掃除の人は黒人というふうに人種がわかれ、「白人が威張っているな」という第一印象でした。こうした差別がアメリカ国内に歴然としてあるのだから、今年四月末のロス黒人暴動はまさに起こるべくして起こったといえるでしょう。暴動のニュースを耳にして、脅えながら「いつかこういうときがくると思っていた」ともらした友人（白人）を思い出します。

八月下旬、指導教授との相談でこの一年に聴講するゼミ、講義を決めたのですが、その中には憧れのスティーブン・J・グールド（ダーウィニズムの枠内にありながらも、そのドグマに縛られることなくしなやかな進化論を展開する古生物学者）も含まれていました。私の研究室は、幸運なことに、六畳ほどの電話付き個室でした。他学部の日本人研究者（そのほとんどが東大関係者）から、机さえもらえない人もたくさんいると聞かされていましたから、私はことのほか恵まれていたわけです。大学直営店で研究室用に格安のマッキントッシュを買い（北里にもこういう直営店があればいいのにと思いながら）、ワイ

ドナー図書館から本を借り出し、さっそく予習を始めました。久しぶりの学生気分が新鮮だったのか自分でも驚くほど勉強しました。学生の頃、教えるだけの先生は気楽な稼業だと勘違いしていましたが、このとき「学生ほど気楽な身分はないなあ、勉強しているだけでいいんだから」とつくづく実感したものです。

さて九月中旬、いよいよゼミが始まると、たいへんなことになりました。当然のことですがゼミでは英語のできない私のことなどおこまいなく、アメリカ人のペースで議論が進みます。毎週三冊ほど本が指定され、それについて議論するのですから、発言しなければ読んでこなかったということになります。大学院生が発言を競うためか議論の展開があまりに速く、私は最初のゼミで発言の機会をとらえられませんでした。そこで、二回目からはあらかじめコメントをノートに書きとめてから教室へ行き、議論が自分の用意したコメントに関係ありそうなところに来ると、手をあげて発言の機会を求めるようにしました。それでも教授の指名で一瞬シーンとした教室で注目を集めて英語を話すのですから、最初は緊張のあまり思わず声がうわずってしまいました。もちろん的外れしたこともあります。しかし後から教授に「今日のコメントは良かった」と肩をたたかれたときには、ほんとうに「救われた」と心が熱くなったものです。また、そのおかげでノートにコメントがたくさん残り、学期末の課題レポートを書くのがとても楽でした。後で聞いたのですが、科学史学科のスタッフは教育的配慮から、私を特別扱いせずアメリカ人と同じように応対し、

私がどこまでくいさがるのかを試していたという事です。

しかしこうした配慮のおかげで、知らず知らずのうちに英語をみがき、アメリカ人の行動パターンを学習していたと思います。二月には他大学から講演を頼まれるようにまでなりました。ほんとうに、電話一つかけるにもおろおろしていた半年前の自分が信じられないくらいでした。帰国後しばらくしてディアスさんから「お前はアメリカ人みたいになった」といわれ、私はほくそえんでしまいました。一年間必死で英語と闘ってきた私に偶然ディアスさんが合格点をつけてくれたからです。

この留学は北里大学、私学振興財団、フルブライト委員会から援助を受け、英語科の先生方をはじめ、教養部の先生方、事務の方々のご協力を得て成立したものです。おかげさまで、留学中には当初の目的をほぼ果たすことができました。しかし、留学の真価がとわれるのはこれからのことで、成果を研究と教育に形あるものとして還元していかなければなりません。すでに『UP』（一九九二年九月号、東京大学出版会）の巻頭で成果の一端をあらわし、現在はそれをもとに著書の執筆をすすめています。また、ハーバード大学から再度招聘され、この三月にはライシャワー日本研究所で講演することになっており、すべりだしこそ順調です。とはいえ「あいつは一体何のために留学したのかわからない」といわれないよう、これからも研究、教育に精進したいと考えています。

（一九九二年一月）

（英語学）

第10回なんじゃもんじゃの会だより

利用者と図書館との交流の場として皆さんに親しまれている“なんじゃもんじゃの会”も昭和61年10月に開始してから早いもので、10回目を迎えました。今回（平成4年10月20日実施）は、水産学部1年の鈴木勇人さんに“私の歩いた東海道五十三次”と題して夏休みを利用して日本橋から京都三条大橋（550km）までを19日間で歩いた時の体験談をしていただきました。日常生活に圧迫され、大学生活も空虚に感じられた自分をみつめ直すためのひとり旅……鈴木さんにとって有意義な思い出深いひと夏になったことでしょう。やがてそれが自信となり、強い精神力も培われたことと思われます。当日参加された方の感想をいくつかご紹介しましょう。

1 V：「19日間にもおよぶ東海道五十三次を歩き通した鈴木君。1つの目標を達成したということはすごい。貴重な素晴らしい体験を聞けてよかった。」

3 N：「旅をしていく中で自分でいかに妥協せず実行できるのか。又、自分のスタイルの旅をできるのが大切だと思います。旅の経験もどのように他人に伝え共有体験をしていくのかもこれから続けていって下さい。」

1 F：「今まで周りの人もつまらない人ばかりの中で世の中こういうおもしろいやつもいるんだと感じた。」



TREE-SOULを感じられますか

辺見葉子

古代ケルト人は樹木信仰を持ち、特にオーク（みずなら）の木を聖なる木として崇拝していたという。王の戴冠式など祭礼が行われる場所には、必ずこうした聖なる木が聳えていた。ケルトに限らず、部族の支配領域の中心にあるいわゆるaxis mundi「世界樹」が、領土の安定と保全を象徴するというのは、普遍的な観念であった。人々にとって聖なる木は「守り神」でもあり「生命の木」でもあったのだ。仰ぎ見るような大木に永遠の魂を感じとり、畏れの念を抱くのは、人類に共通の心情なのだと思う。だからこそ聖なる木を切り倒すという行為が、各国の神話の中で繰り返し語られてきたのであろう。侵略者が聖なる木を切り倒すという行為は、最大の冒瀆であり恥辱をもたらすものと見做されたのだった。こうした聖なる木をめぐる神話的意味は、現代にまで受け継がれ、例えば今年生誕百周年を迎えたJ.R.R.トールキンの神話作品『シルマリリオン』そしてその続編である『指輪物語』の中でも生き生きと表現されている。

ところで急に卑近な話になるが、私にも特別な想いを抱いている木がある。東京・久が原にある我が家の窓から眺められる、けやきの木立である。どれも堂々たる大木で、区の保護樹林に指定されている。今はけやきの並木道になっているその道路は、かつては六郷用水路であった。六郷用水を建設したのは徳川家康だということから、おそらくその時に植えられたと思われるこのけやきの並木は、ゆうに三百年を越える樹齢ということになる。南側の窓から見える木立は、この辺りの大地主さんの敷地内にあり、ことに見事なものだ。道一杯に枝を延ばして、夏になるとうっそう

と葉を茂らせ涼しい木陰を作るので、話はそれるが、暑い日には怠けて昼寝をする営業車がずらっと並ぶ。夕方までずーっといる常連も少なくない。（これを見るたびに、日本人は皆勤勉だなどというのはウソだと思う。）部屋が緑に染まりそうな夏ばかりでなく、窓からのけやきの眺めは四季を通して目を楽しませてくれる。若葉の季節は少しくすんだ萌黄色が眩しいし、秋の色づいた葉が夕陽に輝く時刻など、うっとり見惚れずにはいられない。又、すっかり葉を落とす冬には、見事な枝振りの神々しいような美しさが鮮烈である。もちろん我が家にとっては借景なのだが、このけやきの眺めが我が家の自慢の種だった。

ところが数年たってアメリカから帰ってきしてみると、お向かいにあった家が駐車場に変わっており、道路沿いの敷地に植わっていたけやきの木はあっさり切り払われてしまっていた。もともと道路は用水跡なので、けやきの並木といっても、ほとんどの木は個人の敷地内にある。保護樹林に指定されているのだから、木はいつまでも守られるものと思い込んでいたのだが、個人の敷地内にある場合は、その個人の都合でいつでも指定からはずされるのだそうだ。小さな敷地の所有者が土地を売る時は、入り口のけやきの大木が邪魔なのだろう。もっとも日本では土地を売る際、木は全部切り払ってしまい、更地にして売るのが慣例なのだと聞いた。けやきの大木のある土地といえば、価値が出るのではないかと私には思えるのだが、これは世の不動産屋さんの常識とはかけ離れているらしい。建設用のトラックの出入りに邪魔だとか、葉が落ちるから面倒だとかそんな風にしか思わないのだ

ろう。ともかく南側の窓からは殺風景な駐車場が見えるようになってしまい、残念でしかたなかった。それでもまだ救われたのは、駐車場と大地主さんの敷地との境界に植えられたけやきが、ことさらに素晴らしい大木で、夏に葉を茂らせると駐車場をほとんど隠してくれたことだ。この大木の枝の半分は、駐車場の方へ張り出しているのである。目には見えないが、当然根っこも半分は駐車場の方へ延びているのだろう。

しばらくして、その駐車場にマンションが建設されるという話が持ち上がった。業者が我が家にも説明に現われた。三階建てを計画しており、二階の我が家はずいぶん日当たりが悪くなりそうだった。でも私の最大の心配は例のけやきの木のことだった。三階建てのマンションを建設するという事は、かなり地面を掘るのだろう。するとあの張り出した根は一体どうになってしまうのだろう。それに当然枝も半分切られてしまうのだろう。あれだけの古木の半分の切ってしまったら枯れてしまうのではないか。業者に計画の変更を頼んでみたのだが、折しもバブルの最高潮期、高く買った土地なのだから最大限に有効利用しなければ元が取れない、木のためにスペースを譲るなんてまさか、と相手にされなかった。

私はなんとかして愛するけやきの木を守ろうと決意を固め、区役所に相談に行った。しかし「緑を守ろう」とスローガンを掲げている大田区は、実は何もやる気がないのだということが分かっただけだった。それならば周囲の住民で反対運動を起こして抵抗しようと思ひ立ち、それまで全く近所付き合いのなかった家のベルを押し、けやきの木を、そして環境を守りたいと訴えた。ところがこれも見当はずれ。世の中ではさかんにエコロジーが論じられ、木の果たす生態系への重要な役割が叫

ばれているというのに、「緑はいいけれど樋がつまって迷惑なのよね」とか「落ち葉を掃くのが大変で」とかそんな哀しいまでに近視眼的な返事しか返ってこなかった。ところで私のそんな行動は大学院の仲間からさんざんからわれてしまった。「辺見さんはグリーン・アクティヴィストなんだから」とか、「ケルトのドルイド僧がオークの木を拝んだみたいに、そのけやきの木に呪文でも唱えているんじゃないの？」などとみんな勝手に面白がっていた。

まあそれはいいとして、すっかり自分の無力さに情けなくなり、諦めるしかないのかなと思っていたのだが、当の建設工事がいつまでたっても始まらない。だんだん世の中の景気が後退してきて、その不動産業者はどうも倒産したらしいという噂が流れてきた。結局その土地は人手に渡り、前よりも高い料金を取る駐車場になった。バブル崩壊のおかげでけやきの木は救われたのだった。今はまた再びあの気狂いじみた時代が来ないようにと、それのみを祈っている。長い歳月を経た大木を、恐れ気もなく切り倒すなどという冒瀆行為がまかり通るとは、日本中お金に目が眩んで少し気が変になってしまったのだとしか思えない。そんな時代はもう真っ平。バブル崩壊バンザイ！木に宿る魂を感じとる心を麻痺させてしまう、あの恐ろしい土地高騰など、二度とまた起こりませんように！

(英語学)

後期試験に備えて

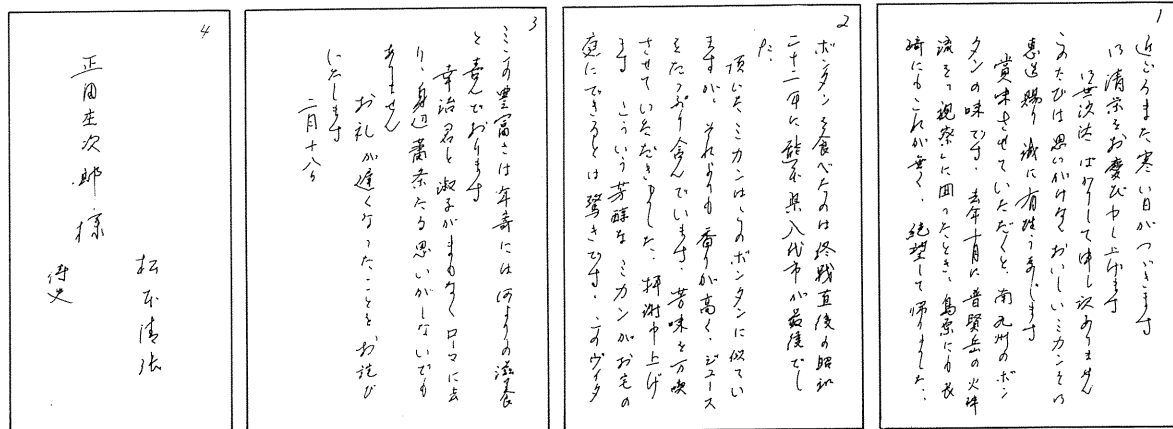
1) 開館延長

1月16日、23日の両土曜日は、午後3時まで開館します。
どうぞご利用ください。

2) 研修室の開放

3階研修室を下記の期間開放します。
期間 1月18日(月)～2月1日(月)
時間 9時から19時まで(平日のみ)

松本清張さんの手紙



正田 庄次郎

私の義弟が松本清張さんのお嬢さんと結婚している関係で、清張さんには家ぐるみで大変親しくしていただいた。20年ほど前に、高知の朝市で買ったボンタンの苗がわが家の庭で成長し、毎年大きな実をたわわにつけるようになった。今年の成果をお送りしたところ、大変喜んでいただき、この2月18日付のお礼状になった次第である。

清張さんは、4月下旬に倒れ、8月4日に亡くなられた。この手紙は、おそらく生前最後のものの一つだと思う。素朴で誠実なお人柄どおりのお手紙であるが、「幸治君と淑子がまもなくローマに去り、身辺蕭条たる思い」という所でドキッとしたのを覚えている。幸治は私の義弟で3月末にイタリア大使としてローマに赴任することになっていた。清張さ

んは、良くない体調の中で、最近も、外国に気軽に取材に出かけられており、まして娘夫婦のところならひと飛びの筈である。文面の、まるで、もう会えないことを予感しているような、清張さんのいいようのない深い寂しさに打たれた。

清張さんには、ご無理をお願いして、大学で2回講演していただいた。1回目は、昭和49年に「古代史の隙間」という題で講演され（「教養部課外講座」）、302教室を埋めた学生・教職員を魅了した。2回目は、昭和61年10月の第8回「白金祭」での講演（「私の小説の世界」）である。

ありがとうございました。合掌。

（経済学）

閲覧ニュース68号

1993.1 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里 1-15-1

電話 (0427) 78-8005

発行責任者 手塚 甫